

使用言語からみた社会経済特性の差異 — 大都市シドニーのジェントリフィケーション —

堤 純

本稿では、移民国家オーストラリアの最大の都市シドニーを中核とするオーストラリア大都市圏を対象として、圏内居住者の社会経済特性を、使用言語、教育程度および所得の観点からとらえ、移民の急増に伴い、オーストラリア社会はどのように変わっているかを、オーストラリア統計局(以下、ABS)の有料のカスタマイズデータ(「テーブルビルダー」¹⁾)を利用して、特定の言語集団別にみた所得と教育水準の関係を考察した。また、小統計区 SA1² 別の高所得者層の割合を示す統計地図を作成し、大都市シドニーの都心部における再開発による「ジェントリフィケーション」と呼ばれる居住地の高級化の現状とその背景を紹介する。

移民の多様化

オーストラリアの総人口は、2011年のセンサスによれば2,150万人である。オーストラリアがまだ白豪主義を堅持していた1969年には1,226万人、1989年には1,681万人にすぎなかった。1969年からの40年余りで約1.8倍に、また、1989年からのわずか20年余りで500万人もの人口が増加した。毎年25万人程度増え続ける人口の約半分は移民1世代目の増加による直接的な人口増加であり、残りの半分を占める自然増加においても、オーストラリアで生まれた移民2世代目・3世代目の増加といった間接的な影響も大きい。

1950年代頃までは、オーストラリアへの移民の

出身地の大多数はイギリスとアイルランドからであったが、それらは1960年代頃から急減しており、代わって東欧や南欧諸国からの移民が増加するようになった。1970年代にはヴェトナムをはじめとするインドシナ系、1990年代後半には東南アジア全般および香港から、そして2000年代に入ってから中国本土からの移民の急増が特徴である。

使用言語からみたシドニー大都市圏内住民の居住分布と社会経済特性

表は、ABSが提供するセンサスデータのうち、カスタマイズ機能「テーブルビルダー」を用いて、シドニー大都市圏(GCCSA)における使用言語別、所得、教育水準の属性をクロスさせたものである。エスニックグループ別の傾向を把握するため、ここでは「家庭で使用する言語」を指標として用いた³。

シドニー大都市圏の2011年のセンサス人口は439万人である。シドニー大都市圏において最も使用されている言語はもちろん英語であり、62.2%である。しかしこれは、全豪平均の76.8%と比べると大幅に低い。英語以外の言語に目を向けると、シドニー大都市圏に暮らす283,963人(6.5%)が中国系の言語、次いでアラビア語、インド系言語、ヴェトナム語、ギリシア語を使用するグループが続く。ABSが2006年版のセンサスについて公開している社会地図(Social Atlas⁴)をみると、大学卒業以上の学歴をもつ人々が多く暮らす地区

表 シドニー大都市圏における使用言語、最終学歴、所得階層別人口の割合 (2011年)

		都市圏全域	英語	中国系言語 (北京語, 広東語等)	アラビア語	インド系言語	ヴェトナム語	ギリシア語
人口		4,391,683	2,732,437	283,963	202,388	150,390	95,101	80,776
使用言語別割合 (%)		100.0	62.2	6.5	4.6	3.4	2.2	1.8
最終学歴、所得階層別割合* (%)		100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
大学卒業以上	週給600豪ドル未満	6.4	4.7	13.1	6.1	17.3	4.6	2.7
	週給600~1,999豪ドル	13.8	12.8	20.0	7.7	26.1	9.4	8.4
	週給2,000豪ドル以上	5.8	6.9	4.1	1.9	5.5	2.1	3.9
専門学校・その他	週給600豪ドル未満	42.6	39.5	46.7	63.0	32.4	60.5	53.9
	週給600~1,999豪ドル	28.4	32.0	15.4	20.2	18.0	22.8	28.6
	週給2,000豪ドル以上	3.1	4.1	0.8	1.1	0.8	0.5	2.6
合計	週給600豪ドル未満	49.0	44.1	59.7	69.1	49.6	65.2	56.6
	週給600~1,999豪ドル	42.1	44.8	35.4	28.0	44.1	32.2	37.0
	週給2,000豪ドル以上	8.9	11.0	4.9	2.9	6.2	2.6	6.5
不詳		6.5	2.6	1.8	4.0	1.9	2.7	3.7
分類不能		19.2	20.8	13.6	23.3	18.2	19.6	12.6

* 不詳及び分類不能を除く。

資料：オーストラリア統計局 (ABS) 「2011年人口・住宅センサス結果」

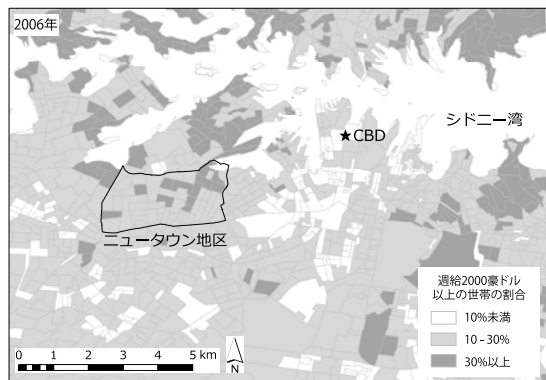
は概ねシドニー湾北部の高所得地区であり、行政や企業の管理職従事者の多い地区と分布が重なる。これには英語の運用能力と強い相関があることは明らかである。表によれば、自宅で英語を使用する人々の所得水準をみると、大学卒業以上と専門学校以下の学歴に関わらず、週給2,000豪ドル（≒19万円、年収約1,000万円以上、@95円/豪ドル換算）以上のグループの割合がシドニー大都市圏の平均を上回っている。一方で、中国系言語からギリシア語まで英語以外の上位5つの言語グループについてみると、インド系⁵を除くすべてのグループにおいて、大学に進学せず、週給600豪ドル以下の所得グループがシドニー大都市圏の平均よりもかなり多い。さらに興味深い点を挙げれば、

中国系言語とインド系言語のグループは大学卒業率が高く、週給600豪ドル以下の所得グループはもとより、週給600~1,999豪ドルのグループ、週給2,000豪ドル以上のグループの割合もシドニー大都市圏の平均を大きく越えている。シドニーは多文化共生都市として脚光を浴びる機会が多いが、その中で、中国系とインド系が他のエスニックグループよりも突出してオーストラリア社会で存在感が大きいといえる。

ジェントリフィケーションの進行

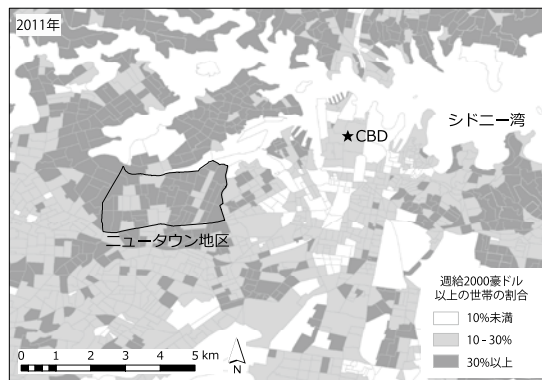
1990年代後半以降に進展したグローバリゼーション下において、シドニーはオーストラリア国内では最も急速に、かつ顕著に成長した都市である。

図1 シドニー都心周辺部における高所得世帯の割合 (2006年)



資料：ABSのデータをもとに作成

図2 シドニー都心周辺部における高所得世帯の割合 (2011年)



資料：図1と同じ。

アジア太平洋地域の拠点として、国際金融機能や外資系企業の地域本社も集積し、世界都市としてのシドニーは大きく発展して今日に至っている⁶。シドニーの中心業務地区（以下、CBDと略記）およびその周辺部ではオフィスと高層コンドミニアムを組み合わせた複合的な再開発事業が数多く行われ、ダーリングハーバー地区、ワールドスクエア地区、さらにはシドニー湾を越えてノース・シドニーへのバックオフィスの拡大などが急速に進展した。

図1（2006年）および図2（2011年）は、各年次のセンサスの小統計区を対象に、世帯収入（常住地）に基づいて世帯数を集計し、週給2,000豪ドル以上の割合を示したものである。これらの図によると、2006年の段階では高所得者の割合の高い地区はシドニー湾に面した（とくに北部の）眺望のよい地区が中心であったが、わずか5年後の2011年には、シドニーのCBD（図中★）の西南西約3kmのニュータウン地区を中心に、各統計区内に占める高所得者の割合が30%を越える地区が急増した様子がみてとれる。限られた紙面の都合から詳細については割愛するが、高所得と低所得

（週給500豪ドル≒47,500円、年収約250万円以下、@95円／豪ドル換算）のそれぞれのグループについて過去5年間の移動の発地と着地を「テーブルビルダー」を用いて集計してみると、ニュータウン地区へ過去5年間に流入した者のうち、国内から流入（全流入者の35.5%）した者の大半はシドニーのCBD周辺およびCBDとニュータウン地区の中間に位置する地区から外方へ向かう移動であった。一方、2006年の時点でニュータウン地区に居住していた住民のうち、おもに低所得者層を中心に、ニュータウン地区よりもCBDからの距離が遠い地区へ押し出される移動が確認できた⁷。

移民の文化的背景—仏教信仰者の分布

シドニー大都市圏における移民の文化的背景を知るため、近年の急増が著しいアジア系移民に着目した。ここでは彼らの特徴を端的に表すデータとして、信仰する宗教に関するデータ（仏教の信仰者）に着目し、海外生まれか否かについての属性をクロス集計したデータを用いた。仏教には中国のみならずタイやヴェトナム系を含め広くアジア諸国からの移民が数多く含まれることは承知の

上で、仏教の信仰者の分布を概観（本稿では地図は割愛）した。それによると、全体的にはシドニー湾の南側に仏教信仰者の分布の集中域が確認でき、中でもシドニーのCBDから5km圏内とCBDから西南西方向に30km程度の郊外に当たるカブラマッタまで集中域がみられる。また、CBDやシドニー湾北部の郊外に海外出身者の割合が高く、分布の集中するシドニー湾南部にはオーストラリア出身の仏教徒が多いことが指摘できる。特筆すべき点としては、海外出身の仏教信仰者の多い地区は高所得者層の多い地区の分布と重なり、逆にオーストラリア生まれの仏教信仰者の多い地区は比較的低所得者の多い地区と重なるのが認められる。

日本の社会経済属性データの充実に向けて

本稿で紹介してきたように、オーストラリアのセンサスでは、詳細な統計区を対象に、社会・経済属性に関して充実したデータを入手することができる。これらをGISと組み合わせて地図化することにより、従来の分析よりもよりピンポイントなテーマ毎の分析も可能である。

一方で、日本の国勢調査をみれば、使用言語や宗教、所得については、そもそも質問項目にすら含まれていない。教育水準については10年ごとに調査が行われ、市町村レベルでの集計値は公表されているものの、本稿で紹介したオーストラリアの事例と比べると、データの内容において大きく見劣りすることは否めない。今後、日本においても、特に、大都市や地方におけるより効果的な政策立案や計画策定などのために国勢調査の質問項目を増やして社会経済的な属性に関するデータを増やすこと、そして、地域メッシュや町丁、字別

といった小地域単位でのこの種のクロス・データの提供を強く要望してやまない。

本稿は日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(B)(海外学術)「ネオ・リベラリズムの進展とアジア化するオーストラリア社会に関する人文地理学的研究」(代表者:堤 純, No.24401036)の成果の一部である。

<注>

- 1 ABSは2013年7月に、2011年実施のセンサスデータの公開を目的とするテーブルビルダーというオンラインサービスを750豪ドル(≒71,000円、1豪ドル=95円で換算)で開始した(2009年8月にリリースされた2006年センサスを対象とした同製品は1,655豪ドル)。「表を作成する」というサービス名の通り、購入者が任意の統計地区ごとに任意の属性を自由に組み合わせることができる。また、すべてのデータ利用がオンライン化されている上、アクセス回数に制限はない。詳細は以下の文献を参照。
堤 純 (2012):メルボルン大都市圏における通勤特性-オーストラリア国勢調査「テーブルビルダー」データを利用して-。『統計』、日本統計協会、63(2)、pp.19-25。
- 2 SA1は、オーストラリアのセンサスでは最小の統計区であり、400人程度(先住民の居住区周辺では90人程度)で一つの統計区を構成している。
[http://abs.gov.au/websitedbs/D3310114.nsf/4a256353001af3ed4b2562bb00121564/6b6e07234c98365aca25792d0010d730/\\$FILE/Statistical%20Area%20Level%201%20-%20Fact%20Sheet%20.pdf](http://abs.gov.au/websitedbs/D3310114.nsf/4a256353001af3ed4b2562bb00121564/6b6e07234c98365aca25792d0010d730/$FILE/Statistical%20Area%20Level%201%20-%20Fact%20Sheet%20.pdf) (2014年4月21日最終検索)
- 3 2010年10月1日現在のシドニー大都市圏に滞在する邦人数は25,808人であるが、テーブルビルダーにより集計した「家庭で日本語を使用する者」は12,827人(2011年8月)であった。
<http://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/tokei/hojin/11/pdfs/1.pdf> (2014年5月7日最終検索)
- 4 <http://www.abs.gov.au/AUSSTATS/abs@.nsf/DetailsPage/2030.12006?OpenDocument> (2014年5月7日最終検索)
- 5 前掲3にも関連するが、「家庭で使用する言語」という指標では、家庭で英語を使用する日本人やインド人などを抽出することはできない。エスニックグループを特定するには、親の出身国や宗教など他にもいくつか指標が考えられるが、本稿では言語に着目した。
- 6 Connell, J., (2000): Sydney. *The emergence of a World City*. Oxford University Press, Oxford.
- 7 堤 純 (2014):シドニーにおけるジェントリフィケーション。「日本地理学会発表要旨集」、85, p.39.

(つつみ じゅん・筑波大学生命環境系准教授)